

# スイスはこんな国

サンモリッツ・ルガーノ周辺の“見て・食べ・歩き”

=日本・スイス 国交 150 周年記念に=

( 3 )

山本 浩 ( 29 政経 )

## 標高 3,306m のコルヴァッチ展望台へ

7月12日(土) 5時半の目覚め。スイス到着以来、初となる快晴の朝を迎えた。然し午後には雨の予報なので8時にロビー集合、ロープウェイのステーション、スールレイ Surlej Station 1,870m へ向かう。スールレイから中間駅のムルテル Murtel 2,699m まで10分。乗り継いで頂上駅のコルヴァッチ Corvatsch 3,306m まで11分の空中散歩だが、高度を上げるにしたがって眼下に広がるシルス Segl、シルヴァプラーナ Silvaplana、チャンプフェー Champfer の湖と緑地の中に点在する集落の眺めは素晴らしい。



ロープウェイからの眺め

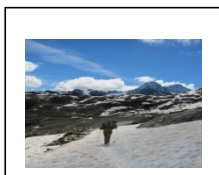


コルヴァッチの白い稜線

転じて目を上に向けるとベルニナ連峰の中に一瞬ピッツベルニナ Piz Bernina 4,049m を見たように思ったが、直ぐ霧の中に隠れてしまった。

展望台から見える筈だったベルニナ山群は霧で駄目だったが、直ぐ手前のピッツムルテル Piz Murtel 3,443m から右のピッツコルヴァッチ Piz Corvatsch 3,451m へ長く伸びる雪の見事な稜線は幻想的でした。

反対側の一昨日訪れたピッツネイルと連なるピッツジュリア等の山々、眼下に横たわる湖群を懐かしく眺めながら10時過ぎ再びムルテルまで下りて、コルヴァッチ氷河が作ったカール地形の中をスールレイ峠 Fuorcla Surlej 2,755m へ向けて歩き出す。緩やかな登りだが、何か所か雪渓を越えて行かねばならない。



スールレイ峠へ



薄赤い雪渓



メールプリメル

奇妙に思ったのは雪の表面が所々薄赤く染まっていることで、聞いてみたら黄砂だというのが、まさか中国から飛んできた訳はあるまい(アフリカ北部の砂漠らしい)。

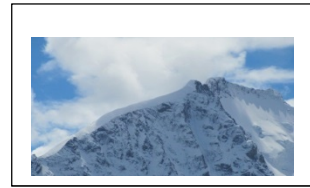
山側の土手地にはピンク色の可愛い花が一杯咲いている。サクラソウ科のメールプリメルだ。

左手にピッツスールレイ Piz Surlej 3,188m を見ながら30分ばかり歩いて左手にサンモリッツ・バートへの道を分けると勾配のきつい急登、これを頑張ってスールレイ峠に到着する。

峠に立つと目の前がパーッと広がり、超一級の山岳風景が現れた。先ず目に付くのがエンガディンの最高峰ピッツベルニナ。一目でも自分の眼で確かめたいと思っていたアルプスで最も美しい稜線とされるピアンコグラート Biancograt は、その名のごとく頂上から左肩に白く長く流れている。



ピッツベルニナ



ピアンコグラート

先日このルートでピッツベルニナに登頂するビデオを見たが、鋭く両側に切れ落ちたナイフリッジの上を一步一步、足場を確かめながら長い雪の稜線を行き、その端末から一旦下って頂上への厳しい岩稜に取りつく。美しさの中に危険と困難を秘めたルートだった。

ピッツベルニナから右に平たい頂上のピッツセルセン Piz Scerscen 3,971m、続いて鋭い峰を突き上げているピッツロゼック Piz Roseg 3,937m、その間に急傾斜のチェルヴァ氷河 Vadret da Tschierva の落下ポイントが凄まじい迫力で迫ってくる。更に右には 3,500m 級の峰が続き、セラ氷河とロゼック氷河が合流してロゼック谷へ向かう。

ピッツベルニナの左手はピッツモルテラッチ Piz Morteratsch 3,751m やピッツチェルヴァ Piz Tschierva 3,546m、ピッツシェルセン Piz Chalchagn 3,154m がピッツスールレイ、ピッツロザッチ Piz Rosatsh 3,123m 等の山との間にロゼック谷を形成し、ロゼック氷河やチェルヴァ氷河の融水を受け止めポイントレジーナの少し上でフラッツ川 Ova da Flaz に流入している。

### 高所のホテルでジャグジーを経験

筆舌に尽くしがたい眺望に時を忘れていたが、昼時にもなっていたので峠小屋のレストランに入り、お馴染みのご当地料理、大麦のスープ（ビュンドナーゲルステンズッペ）を食べた。

この後、ロゼック谷のホテル・ロゼックグレッチャー迄急峻な 756m の道を一気に下り、車の入らないロゼック谷を馬車でポイントレジーナへ帰るのだが、この下りに自信がないという萩原さんと足の爪を痛めている私、それに家内がお付き合いで3人はムルテルに引き返すことにした。

些か寂しい思いをしながらポイントレジーナへ帰ったが、未だ日も高いのでマイストラ通りの店をあちこち覗いてみた。



エーデルワイス



マムート



木彫飾りの水場

花屋さんには鉢植えのアルプスの名花エーデルワイスやエンツィアンがある。種も売っていたので、我が家でも花が咲くだろうかと聞いたら、とても無理という。成程ここは標高 1,800m の街だった。

スイスの山用品の店マムート MAMMUT があったので入ってみたら、流石に品揃えが豊富で日本ではあまり見かけないような柄や生地 of 山衣もあった。

人通りはさほど多くないが寂れた感じはなく、ローカル色豊かで明るく清潔であり、通りを飾る

花が目を楽しませてくれる。カラフルなカワセミらしい木彫が口から水を出す水場はこの通りの花形だ。

ホテルへ帰って昨夜経験済みという萩原さんにジャグジーに案内してもらおうことにした。入り口のカウンターでバスローブを貰い、部屋に帰って水泳パンツとタオルを持ち4階にある Wellness tucker へ出掛ける。女性客が既にいたが常連らしく、ジャグジーの種類などをあれこれ教えてくれた。そのうち若い恋人同士らしいカップルがやってきたので、あまりお邪魔虫にならないうちに退散。本当はもう少しいたかったのだが、まあ経験出来ただけで満足することにした。

夕食時全員が揃ったところでロゼック谷への下りの話を聞いたら危険個所がない訳でなく、下村さんが転倒して打撲を負ったりしたが総じて快適な下りで、歩き足りない数名がロゼックのホテルからの馬車に乗るのをやめてポントレジーナまで歩いた位だという。これは判断を誤ったかなと思ったが、それは済んでしまった話、悔やむのは止めにした。

今日はたまたま萩原さんのお誕生日。志波ガイドに話したら天溪からシャンペンの差し入れがあり、「ハッピーバースデー ディア明子さん」の乾杯でディナータイムが始まった。

### セガンティーニが生涯終えたヒュッテに到着

7月13日(日) 5時30分起床、7時20分朝食。今日はセガンティーニヒュッテに登った後ディアヴォレッツアのベルクハウス泊まりになるが、スーツケースは持ち込めず翌日のルガーノ送りになるので、1日分の荷物を仕分けしホテル預けしてからの出発となる。

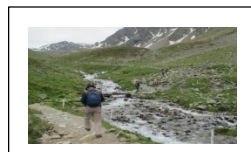
ポストバスで10分ばかりのプントムラーユ Punt Muragl 1,738m で大木のレルヒ(西洋唐松)が脇にあるステーションから100年の歴史を誇るフニクラに乗り約10分、到着したムオッタスムラーユ Muottas Muragl 2,453m はサンモリッツに近く、エンガディンの谷やベルニナ・アルプスの山々等、四季折々の美しい眺望が楽しめる人気スポットだ。

テラスに出て下を見ると、乗っているときは判らなかったがフニクラ路線に沿って太陽光発電のパネルが長々と繋がっている。晴天率の極めて高いこの地域にあっては効率も高いのだろう。

眼を上げるとエンガディンの山へ向かってロゼック谷が真っ直ぐに伸び、手前のポントレジーナにはベルニナ線の赤い列車が行く。これぞ絵になる風景である。



長く続く発電パネル



ムラーユ川を渡る



豊富な標識

9時10分、昨日軽い打撲を負った下村さんを残して我々はセガンティーニヒュッテへ向かう。我等が目指すのは大きく抉れたムラーユ谷 Val Muragl を隔てた赤茶けた山塊の稜線だが、この稜線は左肩上がりで高度を上げてピッツムラーユ Piz Muragl 3,157m からピッツラングアルト Piz Languard 3,262m へと繋がっている。先ずはこの大きな谷を越えねばならないので、もったいないながら緩やかに高度を下げる。直ぐ近くの Tegia da Muottas に牛舎があり、周りに草付きの斜面が広がっていた。左手奥にはピッツヴァドレ Piz Vadret 3,199m 等の雪峰が千切れ雲の合間から見え隠れしている。

このコースもそうだが、スイスのハイキングコースは真に標識が多い。スタートや分岐点は勿論、

途中にもあるので安心して歩くことができる。黄色い標識はハイキング用 Wanderweg で目的地と所要時間、標高等を記載して方向を示している。黄色だけのものは簡単に歩けるコースだが、標識の先端が白地に赤線の場合は経験者向け山道 Bergweg であることを示している。

Margun 2,338m からムラーユ川 Ova da Muragl の上流へ少し歩いたところで木橋を渡ると直ぐに中腹を巻いてアルプラングアルト Alp Languard 2,330m へ至るパノラマ路 Panoramaweg と稜線へ上がり、セガンティーニヒュッテを経てアルプラングアルトへのクリマ路 Klimaweg の分岐となる。標識はどちらの路も山道(ベルクヴェーグ)を表示していたが、これは相当の差がある筈だ。

勿論我等はクリマヴェーグ、傾斜を緩和するために九十九折に付けられた山道を右に左にと登っていくが、それでもこの登りは辛い。約 300m の高度を何とかクリアして稜線 2,647m に着くと、遙か彼方に赤い小屋が見えている。行って見て判ったのだが、これはセガンティーニヒュッテの簡易トイレだった。

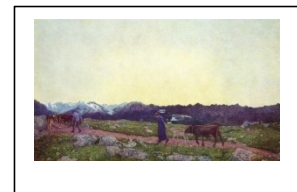
11 時 10 分、Chamanna Segantini 2,731m と書かれたヒュッテ到着、これはロマンシュ語だろう。セガンティーニが此処で三部作の「自然」を描き、1,899 年 9 月 28 日、急性腹膜炎で 41 歳の生涯を終えた場所に今、自分はいる。そして先日訪れた美術館はこの小屋から見て太陽が沈む方角にあるという。



クリマヴェーグの登り



セガンティーニヒュッテ到着



三部作「自然」

小屋の壁に“NO PICNICK!”(持ち込み禁止)とあったので三度目の大麦スープ(ビュンドナーゲルステンズッペ)を頼んだ。値段は中間だったが味は一番良かった。

やはり我等日本人グループは珍しいらしく、小屋の管理人夫妻 Angelo & Susanne Baggensto が何かと声を掛けてくれたので、水澤清美さんが描いた、ここから見た山のスケッチに全員がサインして差し上げてきた。

下りは始め緩やかに山腹を巻いて行く。振り返ると石造りのセガンティーニ小屋の屋根には幾つもの石と太陽光発電パネルが置かれていた。もう再び来ることはあるまいと名残を惜しむ。

やがて道は右に鋭く落ち込んだ崖にへばり付いた険路になり、ザイルのお世話にもなる。斜面には無数の崖崩れ防止柵。緊張感を持って下り続けるうちにアルプラングアルトのリフトステーションが見えてきた。手前の山腹に恐ろしく毛の長い茶色の牛が数頭。色々な牛を見た心算だが、こんなにはお目にかかったことがない。

当初は更にポントレジーナ迄 2 時間のハイキングの案もあったようだが、今日中にディアヴォレッツアまで行かねばならないので、時間節約のためチェアリフトを使う。然しこのリフトも只者ではなく、何と途中から左に折れ曲がる構造になっている。

サンモリッツの斜行するエレベーターといい、時計を初めとする機械文明の歴史がこんな珍しい乗り物の経験をさせてくれるのだろうか。



アルプラングアルト



変わった牛



曲がるチェアリフト

何のためにリフトのコースを曲げたのか理由は判らずじまいだが、この曲がり角の森の中に 13 世紀の壁画がある有名なサンタ・マリア教会堂 Kirche Sta. Maria があったことを知り、訪れる位の時間は作れたのにと後で悔やんだことだった。

### ロープウェイで荒ぶる「悪魔の山」へ

スーツケースはもう明日の宿泊地ルガーノに発送されている筈なので、別分けして預けてあった荷物を受け取りにホテルに戻って見たら、ムオッタスマラーユで別れた下村さんが待っていて「この鍵の持ち主はいませんか？」と。何とそれは私のスーツケースの鍵ではないか。

下村さんの話によると、皆がセガンティーニ小屋へ出発した後、スーベニールショップのスタッフからこの鍵はあの日本人グループの誰かのものに違いないと言われて預かったという。私はこの鍵を小銭入れに仕舞っていたが、ショップで記念のピンバッジを買うときに適当な小銭がなくモタモタしたことを思い出した。

それにしてもスタッフがその時の情景を覚えてくれていて、たまたま前日の故障のために残っていた下村さんが同じグループと思って渡してくれたから私の手元に戻ってきた訳で、このとんでもない奇跡的ラッキーに大感謝だった。私も予備の鍵を持たない訳ではなかったが、あろうことかその予備はスーツケースの中、従ってもしこの鍵が手元に戻らなかったら私はルガーノでスーツケースを壊してしまうしかなかったのだ。

スポーツホテルでは自家用の車を 2 往復させて我々をポントレジーナ駅まで送ってくれた。

ベルニナ鉄道でベルニナ・ディアヴォレッツァ Bernina Diavolezza 2,093m まで約 30 分、少し高みにあるステーションから大型ゴンドラのロープウェイでディアヴォレッツァ 2,978m を目指す。20 分で 900m を一気に駆け上がるが、到着した頂上駅からの眺めは雪と氷と岩塊の世界。深い霧で陽は隠れ、見えない峰々の頂の下には荒ぶる巨龍が躍るが如き墨絵の景色が広がっている。ディアヴォレッツァとは「悪魔の山」を意味するというが、このような光景を眼にして圧倒された誰かが付けた名前なのかも知れない。



荒ぶるディアヴォレッツァ



レストランとベルクハウス

展望台にあるレストランは 1872 年創業の 3,000m 級山上レストランとしてはスイス初、広い窓から山の見晴らしが楽しめ、グラウビュンデン州の伝統料理が味わえる。

隣接する宿泊施設ベルクハウスは壁面をシュタインボックの絵等で飾った立派な建物だが、此処

が 10km のダウンヒルコースの起点であるだけにメインは冬のスキーヤー対応であるらしく、部屋には 2 段ベッドが 2 台、洗面台はあるがトイレは室外共通、夜間は全館消灯なのでペンライト等の用意が必要と、これはやはり山小屋的ホテルということになるのか。

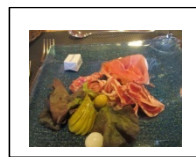
此処にもジャグジーがあると聞いていたので確かめたら、屋外に 4 ~ 5 人位入れそうな円筒形の浴槽があり、煙突と薪用の焚き口が付いている。申し込みば準備に 1 時間半もかかって費用は 19CHF。寒そうだし誰も入らないし、2,000 円の風呂は高いと止めにした。



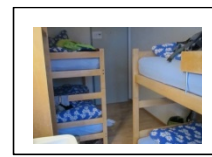
屋外のジャグジー



パリュビール



ビュンドナー・フライシュ



2 段ベッドが 2 台

廊下に果物籠が置いてある。小さいリンゴを 1 個失敬して食べたらこいつは美味い。

夕食の飲み物は最も近くの山の名が付いたパリュビール Palü Bier と赤ワイン、食事には伝統料理のビュンドナー・フライシュ Bündnerfleisch (乾燥牛肉の塊を薄くスライスして食べる) も出てきて満足した。